

幼児のオノマトペ知識に関する研究

近藤 綾¹・渡辺 大介²

Young children's knowledge of onomatopoeia

Aya Kondo¹, Daisuke Watanabe²

Abstract : The present study examined the knowledge of onomatopoeia in 4- to 6-year-olds. The participants undertook two onomatopoeia tests (a test of onomatopoeia related to action/state, and emotion/sense). Each onomatopoeia test contained four categories: the onomatopoeia of action/state (i.e., “eating and drinking”, “walking”, “talking”, and “seeing”) and the onomatopoeia of emotion/sense (i.e., “laughing”, “crying”, “thinking and feeling”, and “aching”). Each category had four onomatopoeia words. The participants were presented with four sets of pictures that described four onomatopoeia words under two conditions: a within category condition in which four pictures were selected from just one of the four categories, and a between category condition in which four pictures were selected from each of the four categories respectively. The participants were asked to choose one picture for each onomatopoeia word from the four alternatives. We found: 1) Young children's onomatopoeia knowledge underwent marked improvement from 4 to 5 years of age. 2) In the action/state test, a between category condition was more accurate than a within category condition, whereas in the emotion/sense test there was no difference between two conditions. 3) According to the onomatopoeia words, young children's understanding levels of those are different. These results are discussed from the perspective of the level of young children's knowledge of onomatopoeia.

Key Words : Young children, Onomatopoeia, Language development

はじめに

オノマトペとは、擬音語、および擬態語の総称である。日常において、子ども、特に幼児はオノマトペを多用する傾向にあり、また、子どもと接する際の大人は、オノマトペを多用する傾向にあるといわれている(福田, 1999; 三好, 2006; 丹野, 2005)。このことから、オノマトペは保育現場において幼児と保育者のコミュニケーション手段の1つとして重要な役割を担っていると推察される。しかし、オノマトペに関する研究がされ始めてまだ日が浅いという背景から、保育の中で幼児や保育者が使用するオノマトペに着目した研究は少ない。

保育の中で保育者が使用するオノマトペに着目した研究(原子・奥野, 2007; 近藤, 渡辺, 2008)では、保育者が使用するオノマトペの特徴が示されている。原子・奥野(2007)は、保育者が使用するオノマトペ表現がどのように機能し、効果的に働いているのかについての調査を行った。すなわち、3名の保育者(クラス担任、養護教諭、非常勤講師)にICレコーダーを携帯してもらい、4つの保育指導場面(絵画および制作指導、リズム運動、歌唱場面、保育指導)のそれぞれにおいて話し言葉を中心に録音し、幼児の反応行動をデジタルビデオカメラで録画した。そして観察されたオノマトペ表現を記述的に抽出した。その結果、保育者は動作や動きの状態を表すときに多くのオノマトペを使用することが確認された。よって、原子・奥野

1 広島大学大学院教育学研究科心理学講座

2 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

(2007)は、オノマトベを活用することでより効果的な指導を行うことができたと報告している。

近藤・渡辺(2008)は、原子・奥野(2007)の研究をより詳細に把握するために、自由保育場面において2名の保育者を観察し、保育者が表出したオノマトベを量的に抽出して分類した。その結果、2名の保育者はともに動作に関するオノマトベを最も多く使用すること、気分・心情に関するオノマトベの表出は少ないことが示された。また、動作に関するオノマトベの表出状況を記述したところ、次の2点の特徴が確認された。第1に、動作に関するオノマトベは保育者自身が動きながら、あるいは、保育者が幼児とともに動きながら使用していることである。第2に、保育者が幼児の動きを誘発する際に動作に関するオノマトベを使用していることである。

原子・奥野(2007)や近藤・渡辺(2008)では、保育者は幼児に対して動作に関するオノマトベを頻繁に使用することが示唆されている。しかし、これらの研究では、保育者が使用したオノマトベについては具体的に言及しているものの、保育者の表出したオノマトベを幼児が理解していたのかについては明らかにしていない。たとえば、保育者が幼児の行動や理解を促すためにオノマトベを使用したとしても、幼児がそのオノマトベに対する知識を所持していなければ、保育者の意図を汲み取ることはできないといえる。そこで本研究では、幼児がオノマトベを知識としてどの程度獲得しているのかについて明らかにすることを目的とし、動作・状態に関するオノマトベと、感情・感覚に関するオノマトベに着目して、それらを刺激語として提示する調査を行う。

動作・状態に関するオノマトベに着目する理由は、保育者が実際の保育場面において最も使用していたからである。そのため、これらのオノマトベに対する幼児の知識を調べることは、保育活動におけるオノマトベ使用の有効性を明らかにする上で重要と考えられる。また、感情・感覚(内的感覚)に関するオノマトベは、近藤らが行った一連の観察研究(近藤・渡辺, 2008; 近藤・渡辺・越中, 2008; 近藤・渡辺・大田・伊藤・小津・越中, 2008)の五感に基づく分類(視覚, 聴覚, 触覚, 動作, 内的感覚)において幼児と保育者の両者からほとんど確認されていない。加えて、幼児を対象とした従来

の研究(苧阪, 1999; 丹野, 2005)においても表出数が少ないことが報告されている。よって、このような感情・感覚に関するオノマトベを調べることは、幼児の表現力の指標の1つとしてオノマトベが利用可能かどうか(近藤・渡辺・大田ら, 2008)を探る上でも重要な指標になると考えられるため、これらのオノマトベに対する幼児の知識も確認しておく必要があるだろう。

一口に動作・状態と感情・感覚に関するオノマトベといっても、それらの分類内には多種多様なオノマトベが存在する。よって、本研究は、一般的かつ、幼児にも比較的なじみのある各4つの下位カテゴリ(動作・状態「食べる・飲む」「歩く」「話す」「見る」; 感情・感覚「笑う」「泣く」「思う・感じる」「痛む」)を使用し、幼児のオノマトベ知識を問う。その際、幼児のオノマトベ知識を詳細に把握するために、1つのカテゴリ内の詳細な知識を問うカテゴリ内条件(例:「食べる・飲む」ゴクゴク, チューチュー, ツルツル・ペロペロ)と、4つのカテゴリ間の知識を問うカテゴリ間条件(例:ガミガミ, ツルツル, ヨチヨチ, ギロツ)の2条件を設定する。

また、本研究では、これらの幼児のオノマトベ知識と年齢の関係について発達的に検討する。近藤・渡辺・大田ら(2008)は、保育の中でも自然体験活動に焦点をあて、幼児と保育者のオノマトベに関する実態調査を行い、オノマトベの検討可能性の1つとして幼児のオノマトベ表出についての発達的な方向性を提言している。すなわち、幼児はまず外界の事物に対するオノマトベを表出し、次第に内的な状態についてのオノマトベを表出するようになるといった、オノマトベの分類に応じた表出時期の違いを論じている。他に、オノマトベの意味理解と年齢の関連を検討した神園(1992)は、3歳から7歳の健常児とダウン症児を対象に、オノマトベを構成する音そのものが聴覚的イメージを容易に喚起し、それを媒介として意味理解が促進されるかどうかについて検討した。具体的には、未知、あるいは親密度の低い擬音語・擬態語のそれぞれのオノマトベを図版で提示して選択させた。その結果、健常児の擬音語の正答数は、加齢に伴って直線的に増加し、擬態語の場合は4歳から5歳にかけてと、6歳から7歳にかけて顕著に増加するといったオノマトベの意味理解の発達や、擬音語は擬態語よりも理解し

易いことが示唆されている。従って、上記の研究からは、本研究における幼児のオノマトペ知識の発達の変化が予測される。

以上のことから、本研究は、幼児の動作・状態および感情・感覚に関するオノマトペの知識について発達の的に検討する。具体的には、動作・状態と感情・感覚に関するオノマトペのそれぞれについて4種類ずつ絵を提示して、調査者が質問するオノマトペにあてはまる絵を幼児に選択してもらう。その際、各分類において、カテゴリ内とカテゴリ間の2条件を設定する。この2条件は、1つの下位カテゴリ（例えば、「笑う」）に属する複数の状況を描写するオノマトペを区別できるかどうかを確認するカテゴリ内条件と、あるオノマトペが描写する状況を複数の下位カテゴリから選択できるかどうかを確認するカテゴリ間条件である。

予測として以下の3点が挙げられる。第1に、幼児のオノマトペ知識は年齢とともに正確さが増すと考えられる。第2に、動作・状態に関するオノマトペと感情・感覚に関するオノマトペでは、保育場面で耳にする機会が多い動作・状態に関するオノマトペの成績が高くなると考えられる。第3に、カテゴリ間条件は4つの異なる状況の中からオノマトペが指し示す状況を選択するため、1つのカテゴリ内の細かなニュアンスの違いを区別するカテゴリ内条件よりもオノマトペ語の選定が容易になると考えられる。

方法

参加児

年少児15名（平均4歳3か月；範囲3:7-4:5；男児8名，女児7名），年中児11名（平均5歳1か月；範囲4:7-5:2；男児7名，女児4名），年

長児14名（6歳2か月；範囲5:7-6:7；男児7名，女児7名）の計40名であった。

材料

オノマトペ刺激 日本語オノマトペ辞典（小野，2007）の“意味分類別さくいん”に記載されている分類の中から、人間の動作・状態に関するオノマトペと感情・感覚に関するオノマトペを選択し、各分類の中から4つのカテゴリを選択した（動作・状態に関するオノマトペ「食べる・飲む」「歩く」「話す」「見る」；感情・感覚に関するオノマトペ「笑う」「泣く」「思う・感じる」「痛む」）。次に、各分類の4つのカテゴリ内に記載されているオノマトペの中から、そのカテゴリを象徴する一般的なオノマトペ語を4語ずつ抽出した（例：「食べる・飲む」カテゴリでは、ゴクゴク，チューチュー，ツルツル，ペロペロ）。よって、抽出されたオノマトペは、動作・状態に関するオノマトペ16語，感情・感覚に関するオノマトペ16語の合計32語であった。これに加えて、練習課題として使用するオノマトペを4語抽出した。なお、練習課題では、人以外の対象物に関するオノマトペを選択した。調査に用いたオノマトペ刺激をTable 1に示す。

抽出した全てのオノマトペについて、そのオノマトペを描写する絵を黒のマジックペンを使用して白画用紙に描いた。描画する際には、絵が抽象的、もしくは、詳細になりすぎないように配慮した。そして、描いた全ての絵をパソコンに取り込み、着色した。その後、全ての絵を図版1枚あたりに4種類配置した。カテゴリ内条件における図版は、動作・状態の4つのカテゴリの図版4枚，感情・感覚の4つのカテゴリの図版4枚の合計8枚であった。カテゴリ間条

Table 1 オノマトペ刺激

練習課題	ケロケロ	ブーブー	ニョロニョロ	キラキラ
動作・状態に関するオノマトペ				
食べる・飲む	ゴクゴク	チューチュー	ツルツル	ペロペロ
歩く	ドッシドッシ	トボトボ	ヨチヨチ	スタスタ
話す	ベチャクチャ	ヒソヒソ	ガミガミ	ハキハキ
見る	チラッ	ジーッ	ギロッ	キョロキョロ
感情・感覚に関するオノマトペ				
笑う	ニコニコ	ゲラゲラ	ニヤニヤ	クスクス
泣く	シクシク	ワンワン	ウルウル	オギャーオギャー
思う・感じる	ドキッ	ワクワク	ションボリ	イライラ
痛む	チクチク	イガイガ	ガンガン	ビリビリ

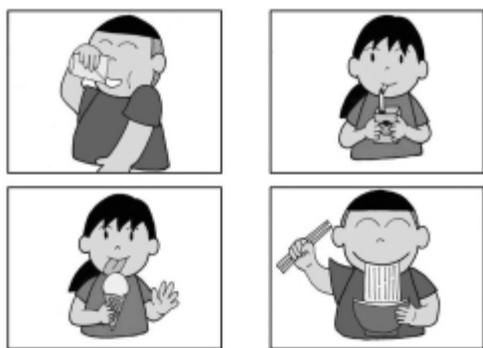


Figure1-1. カテゴリ内条件における図版の例（食べる・飲む）

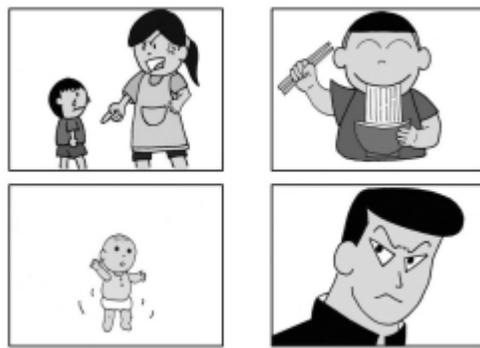


Figure1-2. カテゴリ間条件における図版の例

件では、動作・状態の4つのカテゴリの中から1つずつランダムにオノマトペを抽出し、全てのオノマトペを網羅するように4枚の図版を作成した。また、感情・感覚についても同様に4枚の図版を作成し、両分類で合計8枚の図版を作成した。つまり、図版は合計で16枚作成した。そして、作成した16枚の図版をA4用紙にカラー印刷した。なお、4種類の絵はA4用紙1枚あたりに2×2になるように配置して印刷した。作成した図版の一例をFigure 1に示す（Figure1-1. カテゴリ内条件における「食べる・飲む」図版の例，Figure1-2. カテゴリ間条件における図版の例）。なお，調査では，動作・状態と感情・感覚における条件別の全ての図版を2名の実験者が使用できるように2つのファイルに入れ，ランダムに頁をめくる形式で参加児に提示した。

オノマトペ図版の確認 オノマトペとそれを示す絵が一致しているか，1枚の図版に配置した4種類の絵の中に重複回答を導く可能性のある絵が含まれていないかを確認するために，作成したオノマトペ図版について予備調査を実施した。対象は，大学生および大学院生15名（平均23歳5か月；範囲20:0-35:9；男性3名，女性12名）であった。

予備調査では，A4用紙にオノマトペとそれを示す絵をカテゴリ別に印刷し（動作・状態：4枚，感情・感覚：4枚），絵が表すオノマトペを選択してもらった形式で対象者に回答してもらった。また，調査用紙の最後には自由記述欄を設けて問題点やそれに対する改善策等も記入してもらった。そして，各対象者の回答と自由記述での意見に基づいて，問題があるいくつかの絵の修正を行い，最終的なオノマトペ図版を決定した。

手続き

調査は保育園の静かな一室で行い，2名の調査者（AとB）が同室の対角線上に机を配置し，参加児を2名ずつ部屋に連れてきて個別に実施した。調査者は参加児と横並びに座り，机の上には図版ファイルを置いた。オノマトペ課題は，調査者Aが動作・状態と感情・感覚に関するオノマトペのカテゴリ内条件を担当し，調査者Bがカテゴリ間条件を担当した。つまり，部屋に連れてきた2名の参加児（IとII）のうち，まず調査者Aが参加児Iに対してカテゴリ内条件のオノマトペ課題を実施し，同時に，調査者Bが参加児IIに対してカテゴリ間条件のオノマトペ課題を実施した。そして課題終了後に，調査者Aが参加児IIに対してカテゴリ内条件のオノマトペ課題を，調査者Bが参加児Iに対してカテゴリ間条件のオノマトペ課題を実施した。調査にかかる時間は15分程度であった。

調査者は参加児に対して「今から絵を使ったクイズをするね！まずは，クイズの答え方を教えるから一緒に練習してみようね」と教示した。そして，練習図版を提示しながら「これを見てくれる？4つの絵があるでしょ。○はどれかな？指さして教えてくれる？」と教示した。また，「分からないときは，“分からない”って教えてね」と併せて教示した。練習課題終了後，調査者は「○はどれかな？」と質問する形式で本課題を実施した。課題は1枚の図版につき4問（カテゴリ内条件32問，カテゴリ間条件32問）であり，4種類の絵は4つのオノマトペのいずれか1つに対応した。なお，オノマトペ課題では，2つの分類（動作・状態，感情・感覚）の実施順序，4つのカテゴリの実施順序（動作・状態「食べる・飲む」「歩く」「話す」「見る」；感情・感覚「笑う」「泣く」「思う・感じ

Table 2 年齢、分類と条件別の平均オノマトベ得点 (SD)

	年少児	年中児	年長児
動作・状態			
カテゴリー内	7.1** (2.2)	8.8** (2.7)	10.5** (2.8)
カテゴリー間	8.7** (3.0)	12.1** (2.2)	12.8** (2.5)
感情・感覚			
カテゴリー内	7.7** (3.1)	10.0** (2.4)	11.4** (2.3)
カテゴリー間	8.8** (3.2)	10.5** (2.1)	11.8** (2.3)

注.*はチャンスレベルより値が有意に高いことを示す (** $p<.01$).

る」[痛む]), 1枚の図版における4種類の絵の質問順序の全てにおいてカウンターバランスをとった。

結果

Table 2は、年齢、分類と条件別のオノマトベ得点の平均値と標準偏差、チャンスレベルと平均得点を t 検定により比較した結果を示している。オノマトベ課題は、正答を1点として、参加児ごとの分類と条件別オノマトベ得点を16点満点で算出した。

オノマトベ得点について、3 (年齢: 年少児, 年中児, 年長児) \times 2 (分類: 動作・状態, 感情・感覚) \times 2 (条件: カテゴリー内, カテゴリー間) の3要因分散分析 (ANOVA) を行った。第1要因は参加者間要因, 第2, 第3要因は参加者内要因であり, 統計的分析では有意水準を5%に設定した。その結果, 年齢の主効果 ($F(2, 37)=11.87, p<.01$), 条件の主効果 ($F(1, 37)=14.95, p<.01$), 分類と条件の交互作用 ($F(1, 37)=8.24, p<.01$) がそれぞれ有意であったため, 下位検定を行った。なお, 以下の分析における下位検定では常にRyan法を用いた。下位検定の結果, 年齢については, 年少児よりも年中児と年長児の得点が有意に高かった。

分類と条件の交互作用が有意であったので単純主効果について検討した。その結果, 動作・状態における条件の主効果が有意であり ($F(1, 74)=23.20, p<.01$), カテゴリー間条件の得点がカテゴリー内条件の得点より有意に高かった。一方, 感情・感覚における条件の主効果は有意でなかった ($F(1, 74)=1.88, n. s.$)。

次に, 幼児のオノマトベ知識について調べるために, 各オノマトベ語に関して2条件 (カテゴリー内, カテゴリー間) のいずれにおいても正答した場合を完全正答とし, 年齢を統合した全体の正答率と, 年齢別の正答率をそれぞれ求めた。各分類のオノマトベにおける完全正答率の順位

をTable 3に示す (Table3-1は動作・状態に関するオノマトベ, Table3-2は感情・感覚に関するオノマトベ)。各オノマトベ語を完全正答した人数の偏りを年齢間で比較するため, χ^2 検定 (または直接確率計算法) を行った。その結果, 動作・状態のオノマトベでは, ドッシドッシとチラッの2語で人数の偏りが有意であり (順に, $\chi^2(2, N=40)=6.84, p<.05$; $\chi^2(2, N=40)=6.52, p<.05$), どちらの語も年長児の正答率が高く, 年少児の正答率が低かった。感情・感覚のオノマトベでは, オギャーオギャーにおける人数の偏りが有意であり ($\chi^2(2, N=40)=6.27, p<.05$), ニコニコ, クスクス, ドキッの3語で有意傾向であった (順に, $\chi^2(2, N=40)=4.91, p<.10$; $\chi^2(2, N=40)=5.90, p<.10$; $\chi^2(2, N=40)=5.74, p<.10$)。ニコニコ, クスクスでは年長児の正答率が高く, オギャーオギャー, ドキッでは年少児の正答率が低かった。

また, 年齢を統合した全体の正答率について直接確率計算法を行ったところ, 動作・状態のオノマトベでは, ペロペロ, ドッシドッシ (いずれも, $p<.01$), ツルツル, ヨチヨチ (いずれも, $p<.05$) の正答率が有意に高く, チラッ ($p<.05$), ベチャクチャ, スタスタ, トボトボ, ヒソヒソ, ハキハキ, キョロキョロ, ジーッ (いずれも, $p<.01$) の正答率が有意に低かった。

Table 3-1 動作・状態のオノマトベ語における完全正答率の順位

順位	下位カテゴリ	全体				
		N=40	年長 n=14	年中 n=11	年少 n=15	
1	ペロペロ	食べる・飲む	95**	100	91	93
2	ドッシドッシ	歩く	78**	100	73	60
3	ツルツル	食べる・飲む	70*	86	55	67
4	ヨチヨチ	歩く	68*	86	55	60
5	ゴクゴク	食べる・飲む	55	64	55	47
6	ガミガミ	話す	48	57	45	40
7	チューチュー	食べる・飲む	38	57	27	27
8	ギロツ	見る	35	43	27	33
9	チラッ	見る	33*	57	27	13
10	ベチャクチャ	話す	28**	36	27	20
11	スタスタ	歩く	25**	36	27	13
12	トボトボ	歩く	25**	36	36	7
13	ヒソヒソ	話す	25**	36	36	7
14	ハキハキ	話す	23**	29	36	7
15	キョロキョロ	見る	23**	29	27	13
16	ジーッ	見る	15**	21	18	7

注.値は完全正答率 (%) を示す。

*は正答率に有意差があったことを示す ($*p<.05$, ** $p<.01$)

下線の引かれた値は正答率が有意に低いことを示す。

Table 3-2 感情・感覚のオノマトベ語における
完全正答率の順位

順位	下位カテゴリ	全体	年長	年中	年少
		N=40	n=14	n=11	n=15
1	チクチク 痛む	73**	79	82	60
2	オギャーオギャー 泣く	70*	86	82	47
3	ビリビリ 痛む	60	79	64	40
4	ドキッ 思う・感じる	58	71	73	33
5	ニコニコ 笑う	55	79	45	40
6	シクシク 泣く	45	50	36	47
7	ワクワク 思う・感じる	45	50	64	27
8	イライラ 思う・感じる	45	57	55	27
9	クスクス 笑う	40	64	18	33
10	ワンワン 泣く	40	57	27	33
11	ションボリ 思う・感じる	35	50	36	20
12	ウルウル 泣く	33*	50	27	20
13	ニヤニヤ 笑う	28**	29	45	13
14	イガイガ 痛む	25**	43	9	20
15	ガンガン 痛む	18**	29	18	7
16	ゲラゲラ 笑う	13**	14	9	13

注. 値は完全正答率 (%) を示す。

は正答率に有意差があったことを示す ($p<.05$,

** $p<.01$)。

下線の引かれた値は正答率が有意に低いことを示す。

感情・感覚のオノマトベでは、チクチク ($p<.01$)、オギャーオギャー ($p<.05$) の正答率が有意に高く、ウルウル ($p<.05$)、ニヤニヤ、イガイガ、ガンガン、ゲラゲラ (いずれも、 $p<.01$) の正答率が有意に低かった。

考 察

本研究では、動作・状態、感情・感覚に関するオノマトベに着目し、幼児のオノマトベ知識に関して発達的に検討した。その結果、オノマトベ課題は、年少児よりも年中児と年長児の成績が高いことが明らかになった。分類と条件については、動作・状態に関するオノマトベでは、カテゴリ内条件よりもカテゴリ間条件の成績が高く、感情・感覚に関するオノマトベでは条件間に差がみられなかった。また、オノマトベ語はそれぞれ、選定し易さに違いがあることが示された。

オノマトベ課題における年齢の結果は、幼児のオノマトベ知識が発達的に変化するという予測1を支持した。これは、オノマトベの意味知識が加齢に伴って増加すると示した神園(1992)の結果と一致する。特に、年少児から年中児にかけての発達的変化が顕著であったことに関し

て、神園(1992)では、擬態語において4歳から5歳にかけて顕著に増加することを示している。本研究は神園(1992)のように擬態語に特化した調査ではなかったが、これらの知見を総合すると、幼児のこの時期にオノマトベ知識は急速に増大すると考えてよいだろう。同時に、オノマトベに関する発達的な研究を行うにあたり着目すべき年齢ともいえるだろう。また、どの年齢においてもオノマトベ得点がチャンスレベルを有意に上回った結果を踏まえると、年少児でも本研究で使用したオノマトベを知識として十分に獲得しているといえる。このことから、オノマトベを使用した働きかけは、比較的年齢の低い幼児に対しても有効であると考えられるだろう。

次に、動作・状態と感情・感覚に関するオノマトベについて、分類と条件の結果から論じる。興味深いことに、動作・状態と感情・感覚に関するオノマトベ課題の結果は同等の成績であった。そのため、感情・感覚に関するオノマトベよりも日常的に耳にする機会が多い動作・状態に関するオノマトベの成績が高いという予測2は支持されなかった。これは、これまでの観察研究(原子・奥野, 2007; 近藤・渡辺, 2008; 近藤・渡辺・大田ら, 2008)の中でほとんど観察されなかった感情・感覚(内的感覚)に関するオノマトベも、幼児はある程度の知識を既に所持していることを意味する。従って、本研究は、観察においてこれまでに確認されなかったことを示した点で意義があるといえるだろう。

条件に関しては、分類と条件の間に交互作用が得られ、動作・状態に関するオノマトベと感情・感覚に関するオノマトベは、条件によって正確さが異なることが示された。カテゴリ内条件では両分類の得点間に大きな差はなく、また、いずれの得点もチャンスレベルを上回っていた。このことから、幼児は、動作・状態と感情・感覚のどちらのオノマトベに関しても、細かな違いを区別できる程度の知識は獲得しているといえる。

こうしたカテゴリ内条件の得点をベースラインとして考えると、動作・状態に関するオノマトベにおけるカテゴリ間条件では、オノマトベの選定をより促進しているといえる。これはおそらく、カテゴリ間条件では、複数の下位カテゴリからあるオノマトベが描写する状況を選択するため、状況間に明らかな違いが存在する。これにより、たとえオノマトベの細かな意味を

明確に区別していなくても、各オノマトベが描写する大まかな状況（例えば、ゴクゴクなら何かを飲んでいる状況）さえ想起できれば幼児はオノマトベを選定できると考えられるだろう。換言すれば、動作・状態に関するオノマトベは、状況の区別がオノマトベの選定を規定するのかもしれない。

一方、感情・感覚に関するオノマトベについては、条件間に差が見られず、条件によってオノマトベの理解は変わらなかった。こうした結果は、オノマトベの各分類が持つ特徴を反映しているといえる。つまり、感情・感覚に属するオノマトベ語は、1つ1つの単語の持つ意味範囲が比較的狭く、各単語と状況は一対一で対応づけてイメージされるため、選定の正確さに対する提示方法の影響は小さかったと考えられる。これに対し、動作・状態に属するオノマトベ語は、各単語が示す意味範囲が比較的広く、単語が描写する状況を幅広くイメージすることが可能となるため、状況を選択する場合に正確さが増したと考えられるだろう。

いずれにせよ、分類によって条件間の難易度に差がみられた結果は、予測3を部分的に支持したといえる。従って、結果からは、保育者等が幼児に対してオノマトベを使用する場合、幼児は細かな描写の違いまで理解している可能性や、特に動作や状態に関するオノマトベでは、状況がオノマトベの理解を促進することが示されたといえるだろう。同時に、幼児のオノマトベ知識の獲得は分類によって難易度が異なる可能性が示唆されたと考えられる。

最後に、2つの分類におけるオノマトベ語について考察を行う。結果からは、オノマトベ語はそれぞれ異なる難易度を持つことが示された。すなわち、オノマトベの中には、年少児でも理解できる語、年少児には理解し難いが年長児になると理解できる語、年長児でも理解できない語があるといえる。また、例えば、感情・感覚の「痛む」カテゴリにおけるチクチクは正答率が高く、イガイガ、ガンガンは正答率が低いといったように、同一のカテゴリ内でも難易度に違いがあることも確認できる。

これらの傾向は、おそらく、日常的に頻繁に幼児自身が行う行為、もしくは、それらの行為に対する保育者や両親等の働きかけに基づく経験的側面に依拠していると考えられる。例えば、「食べる・飲む」で使用されたオノマトベ語は、日常の中で繰り返し使用される出現頻度の高い

言葉であるといえる。よって、こうした経験から、幼児は「食べる・飲む」カテゴリのオノマトベ語を比較的容易に選定できたといえるだろう。また、本研究は、オノマトベ刺激に図版を使用したため、オノマトベ語と図版の対応づけ易さによる影響も考えられる。すなわち、正答率の高かったオノマトベ語は図版と絡めて理解しやすかった語といえるだろう。

加えて、本研究の結果は、神園（1992）とは少し異なる見解を示した。すなわち、神園（1992）は、擬態語よりも擬音語の成績が高いことを報告している。そして、擬態語は外界に存在しない音を象徴的に、あるいは、共感的に表現するためにより高次な精神活動を必要とするが、擬音語は外界に存在する音声であるため、抽象化、象徴化といった高次な活動ではなく、むしろ、直接的な表象や語音象徴に訴えることで、容易に認識が可能になるという特徴があると説明している。本研究は、保育者が使用するオノマトベを幼児が理解しているのかという観点から、近藤・渡辺・大田ら（2008）や近藤・渡辺（2008）の五感に基づく分類をもとに幼児のオノマトベ知識について刺激を作成したため、刺激の選定においては擬音語と擬態語を厳密に区別していなかった。しかし、本研究で使用したオノマトベ語を事後的に擬音語・擬態語に区別して考えた場合、例えば、チクチクは正答率が高く、グラグラは低いといったように、必ずしも擬音語が擬態語より正確とはいえない。従って、オノマトベ語に関しては、擬音語の中にも、擬態語の中にもそれぞれ難易度が存在すると考えられるだろう。

本研究では、動作・状態と感情・感覚に関するオノマトベに着目し、幼児のオノマトベ知識について発達的に検討した。そして主に次の4点を明らかにした。第1は、オノマトベ知識が年少児から年中児にかけて顕著に増すことを明らかにした点である。第2は、幼児は動作・状態と感情・感覚に関するいずれのオノマトベについても、既にある一定の知識を獲得していると示した点である。第3は、動作・状態と感情・感覚のどちらのオノマトベに関しても、幼児は細かな違いを区別できる程度の知識を獲得しており、特に、動作・状態に関するオノマトベでは、状況間の比較がオノマトベの理解をさらに促進することを示した点である。第4は、動作・状態と感情・感覚に関するオノマトベ語に難易度が存在することを示した点である。従

って、本研究からは、保育活動の中で幼児はある程度正確に保育者の使用するオノマトペを理解していると推察できる。その一方で、幼児にとって理解し難いオノマトペ語の存在も確認されたため、オノマトペ語が、常に幼児の理解を促進するわけではない可能性についても留意しておく必要があるだろう。少なくとも本研究は、保育者という一方向からしか明らかにされていなかった保育活動におけるオノマトペに関して、幼児に着目してオノマトペ知識を調査し、保育におけるオノマトペ使用の有効性に関する一側面を明らかにした点に意義があるといえるだろう。

今後の課題として次の3点が挙げられる。第1は、反応語としてのオノマトペの検討の必要性である。本研究では、刺激語としてオノマトペを提示し、幼児のオノマトペ知識を把握した。しかし、幼児がオノマトペを知識として獲得していることと、それらを使用することは別である。特に、感情・感覚に関するオノマトペに関しては、幼児がそれらのオノマトペを知識として獲得していることは示されたが、従来の観察研究においてそれらは使用されておらず、結果にズレが見られる。よって、感情・感覚に関するオノマトペが表出し易い状況下での観察の実施や、反応語としてのオノマトペを調査する必要があるだろう。このことは、従来の研究においてもその必要性が指摘されており(池田・戸北, 2005; 吉村・関口, 2006)、オノマトペの最大の魅力である表現力に着目するうえでも検討が期待される。第2は、本研究では刺激に図版を使用したがる、細かな描写を図版で示すことに限界があった。本来、オノマトペは生き生きとした情景を描写するための言葉である。よって、今後は実演を行う等の刺激の提示方法や、どのように質問するかといった方法論についても検討する必要性が考えられる。第3は、保育者を対象としたアンケート調査の実施である。オノマトペの使用に関してはおそらく賛否両論ある。従って、保育においてオノマトペが有用であるのかについて、保育者の認識を調べることも必要だろう。

引用文献

- 福田香苗 (1999). 幼児の発話にみられる擬音語・擬態語 荳阪直行 (編著) 感性のことばを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか— 新曜社 pp. 155-174.
- 原子はるみ・奥野正義 (2007). 保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 8, 167-174.
- 池田仁人・戸北凱惟 (2005). 低学年児童の「気づき」の表現に関する研究—生活科におけるオノマトペの機能— 理科教育学研究, 45, 1-9.
- 神園幸郎 (1992). ダウン症児に対するオノマトペを利用した補助言語の開発 1989年度—1991年度科学研究費補助金(一般研究(C)) 課題番号01510071) 研究成果報告書.
- 近藤 綾・渡辺大介 (2008). 保育者が用いるオノマトペの世界 広島大学心理学研究, 8, 255-261.
- 近藤 綾・渡辺大介・越中康治 (2008). 自然体験活動の中で見られる幼児のオノマトペの機能に関する一考察—観察事例による検討— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部(教育人間科学関連領域), 57, 305-312.
- 近藤 綾・渡辺大介・大田紀子・伊藤祥子・小津草太郎・越中康治 (2008). 保育における自然体験活動でのオノマトペ表現に関する実態調査 幼年教育研究年報, 30, 113-119.
- 三好行雄 (2006). 乳幼児言語研究—3歳児における発生語の文法的特質②— 武蔵野短期大学研究紀要, 20, 193-201.
- 小野正弘 (編) (2007). 擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典 小学館.
- 荳阪直行 (1999). 擬音語・擬態語の認知科学 荳阪直行 (編著) 感性のことばを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか— 新曜社 pp. 1-26.
- 丹野眞智俊 (2005). オノマトペ《擬音語・擬態語》を考える あいり出版.
- 吉村浩一・関口洋美 (2006). オノマトペで捉える逆さめがねの世界 法政大学文学部紀要, 54, 67-76.

謝 辞

調査にご協力くださいました保育園の諸先生方および園児のみなさまに心より感謝申し上げます。また、本論文の作成にあたり有益なご助言をいただきました広島大学の杉村伸一郎教授、湯澤正通教授に心より御礼申し上げます。